

『神に愛されている中で』 ヨハネ1:1-6

- 11:1 さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとその姉妹マルタの村ベタニヤの人であった。
- 11:2 このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であって、病気であったのは、彼女の兄弟ラザロであった。
- 11:3 姉妹たちは人をイエスのもとにつかわして、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病気をしています」と言わせた。
- 11:4 イエスはそれを聞いて言われた、「この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。
- 11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。
- 11:6 ラザロが病気であることを聞いてから、なおふつか、そのおられた所に滞在された。

●序論

振り返ると今年の元旦の午後の各地での団らんで北陸地方、特に石川、富山、新潟、特に能登半島の人々が経験した地震はあまりにも突然で、深刻な被害を生み出しました。30年程前の阪神淡路大震災。2011年大阪でも感じるほどの揺れを東日本大震災。

当時、被災されて亡くなられた方々の多くの御遺体をすぐに埋葬する場所がなく、一時的な場所で埋葬されている様子が映像でも見た覚えがあります。

そういう絶望感や喪失感の中で、一人の被災者へのインタビューがありました。

その方は、いろいろな物資や支援は確かに必要だ。けれども今必要なのはビジョンです。これから生きていくことができるほどの夢が欲しいのです…という風に言われていたことが印象的でした。

当時読んでいた一冊の雑誌の中で、「死」について記された記事がありました。

『死』はしばらく本人にとっても、そして送る遺族にとってもきわめて宗教的な事実である。そこに宗教者が積極的に関わるのは当然である。「生」の意味を語るのは比較的易しい。しかし、死の意味を語るのは宗教者でなければできない。

しかも真の慰めと希望と喜びに満ちた意味を、確信を持って語るすることができるのがキリスト教なのではないだろうか。

人の経験や知識では絶望しかないと思えるようなところで、希望を示すことができる。しかも真実な希望を！ 聖書はこう記しています。

ローマ5:3-5

それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。

そしてこの最後にこうあるのです。

：5…なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

神の霊、聖霊がどんな患難も悩みも、超えて神の愛をわたしたちの心に注いでくれる。そういう人の領域を超えた力ある愛が、注がれることを御言葉は示しているのです。

●本論

Ⅰ. その愛を心から信じる

11:3 姉妹たちは人をイエスのもとにつかわして、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病気をしています」と言わせた。

イエスさまに親しい彼女たちが、病気の弟のことを伝えるその言葉は、「主よ、あなたの愛しておられるものが病気です」でした。

彼女たちの中で、その弟が、そして自分たちがどれほどイエスさまに愛されているかを知っています…との思いを込めて伝えているのです。

そして5節にははっきりと、こう記されています。

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

さて11章全体を通してラザロは、実に無名ではなく、無口な登場人物です。そんなラザロについてわかること。ただ主イエスさまに愛されていたということです。

イエスさまに愛されていることを深く受け取る。そのことに信じる。それを告白する。それが大切なことだ…、と、この福音書の記者ヨハネは伝えるのです。

実はこのヨハネ自身が、自分を「イエスの愛しておられた弟子」と表現しています。

13:23 弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。

21:7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。

21:20 ペテロはふり返ると、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのを見た。

これはヨハネ自身のすなおな告白です。それは能力や働きの成果によりません。「ただ愛されている♪」と言える、そのことが、ヨハネの証しであったのです。

振り返って、わたしたちはどうでしょうか？

照れくさい、言わなくてもわかる…。けれども告白することでそれが自分の証しとなります。「わたしはイエスさまに愛されています」と。

今日、あらためて覚えていたいこと。

★それは、神さまは、私たちが何の条件もももうけずに愛してくださっている、という事実です。これが福音です。この御言葉にある通りです。

ローマ5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

自分の側に、どれほど不足や罪があっても、それでもただ神さまはわたしを愛してくださっている…という。そのことを信じることから始めることが大切なのです。

Ⅱ. 望みをイエスさまに置く

かつて東日本大震災の起こった3月の後半にのキャンプの中で、ユースの青年たちが賛美をつくった。「神さまのご計画はわからないけど…今は祈るしかない」と。

その歌詞の言葉が、まさにあの時の私たちの側の事実でした。

そんな中でも、神さまが私たちが愛し、私たちに将来を与えてくださると信じる。

エレミヤ29:11-12の御言葉が開かれ、あの賛美が生み出されたのです。

:11 主は言われる、わたしがあなたがたに対してにしている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。

:12 その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。

わたしはその計画はわからない、けれど神さまは、「わたしが知っている」と言ってくださる。それは平安と将来と希望を与えるものだということです。

そう信じて祈る時、神さまは私たちの祈りを聞くとも言われているのです。

災害 コロナ、さまざまな経験がこれまでもありました。また一人一人の人生の中で経験する挫折や苦難も、わたしたちが突然経験するものだと思います。

まさに暗闇に襲われた感覚です。見えていたもの、つかんでいた大切なものを手ばなさなければならぬ、取り去られるような時です。

しかし、そんな暗闇で、わたしたちを見放さない方を本当の意味で知るのです。

ヨハネ8:12

イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

★”神さまのご計画はわからない”というところから、わたしたちは始めることができます。それは、神さま、イエスさまを信頼して、共に歩む旅路の始まりとなります。

そこからは、人がつくりあげた人の力によるものではない、神さま由来の希望の光を見いだす物語が紡がれてゆくのです。

そういう人生の導き手こそ、まことの羊飼い、イエス・キリストです。

Ⅲ. だから希望を見いだす物語となる

それは、イエスさまと共に紡ぐ新しい物語です。

わたしたちのこの肉体の目では、まだ見えていないかもしれません。

しかし、神さまの働き、また物語は既に見えない霊的世界ですすでに始まっています。

わたしたちの注目すべきは、ヨハネが大切にしている真実をあらわす言葉なのです。

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

これから起こる、ラザロが生き返るといふ、信じられないほど大きな出来事のすべてはこの言葉に集約されます。

光であるイエスさまを見つめていくとき、その愛があるからこそ、私たちは、予測もしていなかった新しい物語を見ることができるようになっていくのです。

★なぜなら、私たちは神さまが私たちを愛してくださっているからです。この事実、わたしたちの信仰人生の軸足を置く者とされているからです。

だからこれは、霊的な世界から始まり、わたしたちの経験として外に現れ出て来る物語となります

ローマ人への手紙5章では、「患難が忍耐、忍耐が練達、練達が希望を生み出す」と語った上で、その希望は、聖霊によって、神の愛がわたしたちに注がれることで現実の経験となっていることが明らかにされています。

5:5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わってい

る聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

あの東日本大震災のあの福島第一原発のの近くに、献堂されたばかりの真新しい美しい教会がありました。そこには多くの人たちが集っていた。

その所での礼拝で、その牧師は語ったそうです。

「私たちは自分の信仰生活を振り返ってこう思うはずです。神さまは最高の人生を送らせてくださった、すばらしい人生だったと。とりわけ、震災のときは、自分では体験できない極限状態の中で、私たちは生ける神さまがどういう神さまであるかを体験したと。すばらしい恵みのときだった。人生で最高のところだったと」。

彼らは「自分たちを愛してくださっているイエスさま！」のもとにいたのです。

●さいごに

さあ今日の物語の主人公はイエスさまです。

このイエスさまに愛されていることが、どれほどの奇跡をわたしたちの人生にもたらすか、ぜひ楽しみにしてほしいのです。それがイエスと共にある物語だからです。

このイエスさまの言葉に、こうありました。

11:4 イエスはそれを聞いて言われた、「この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。

「神の子がそれによって栄光を受けるため」とある。

実は、これはキリストが受けられるあの十字架の死を意味します。事実、このラザロの出来事は、ユダヤの指導者たちのイエスさまへの殺意を決定的な物としました。

イエスさまはそのことをすべてご存じの上で、それでもこのラザロとその姉妹を愛して、この後の奇跡をなさいました。

今も、わたしたちをも見ていてくださいます。わたしたちが罪とその呪いから救われるためには、イエスさまは十字架を負わなければなりませんでした。

それが、「神の子が栄光を受けるため」と表現されていることなのです。

もう一度注目。そのすべての動機は、「わたしたちを愛してくださっているからです」

わたしたちは、この愛を受け取る者とされていることを、覚えましょう。

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

この言葉こそが、わたしたちをも真実ないのちにつなげる言葉なのです。